

社会学を携えた 四国八十八ヶ寺歩きお遍路

— 禅語『而今』を体感する1,321キロ —



一級河川吉野川左岸

市井の人 本間照雄

感謝を伝える歩きお遍路—まえがき

うとうとしながらジャンボタクシーの窓に寄りかかるようにして、流れ過ぎる大海原を見るときも眺めていました。突然、左に広がる海沿いの歩道を金剛杖を右手に持って菅笠をかぶり、ひたすら歩く白装束姿が目に入り、あっという間に追い越しました。振り返りましたが、その姿は直ぐに小さくなり見えなくなっていました。でも、不思議とその姿がはっきりと目に焼き付けられ、通り過ぎてだいぶ経ってから両手を合わせ、心の中で「南無大師遍照金剛」と唱え弘法大師のご加護を願いました。そのひたむきな姿は、雲水の修行姿そのものでした。宗教という枠組みを超え、目の前の一步いっぽを重ねていくひたむきな姿に、自分のこれからの人生の有り様を重ねていたのです。私も歩いて四国八十八ヶ寺を歩いて巡拝したい。この様な気持ちがふつふつと沸き起こりました。

10 余年前、長い公務員生活の終わりの時を迎える 2011（平成 23）年を迎え、退職したらやってみたいことと言ったら何があるのだろうかなどと、さしたる理由もなく考えていました。常々旅行や山に登った時に、その地の歴史やその時の様子を書いてみたいと思っていたことがあり、「四国お遍路」が浮かびました。四国お遍路をして、司馬遼太郎の「街道を行く」のような書き物をしてみたいと思ったのです。しかし、退職の日を目前にした 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、退職辞令を頂いたその足で被災地南三陸町へ行政ボランティアとして赴き、「四国お遍路」は、一瞬の間に消えてしまいました。

2021（令和 3）年 3 月 31 日、私は、20 歳から始まった宮城県職員としての公務員生活 40 年に加え、東日本大震災で甚大な被害を受けた南三陸町での被災者支援及び大学教員としての 10 年、併せて 50 年にわたる現役生活を終え「市井の人」になりました。

私にとって、現役生活を完全に終えるのは、現実的にも感覚的にも、2021（令和 3）年 3 月です。定年退職から 10 年経って、正真正銘の現役から卒業の時を迎えたのです。この為、今度はより具体的に「これから何をしようか」を考えたのです。改めて 10 年前の「退職したら何をしようか」を思い出してみたら、「四国お遍路」が浮かんできました。

私は、直ぐに「四国お遍路」に飛び付きました。何の予定も書き込まれていない真っ白な手帳を手に、何をしたら良いのか整理がつかなかったというのが正直なところです。妻は、唐突な話で戸惑いながらもついてきてくれました。たまたま、足を捻挫していたので、夫のわがままに仕方なくついて行ったという状況です。この時は、「歩いてお遍路」ということは全く頭にありませんでした。

2021（令和 3）年 4 月 18 日に仙台を出発し、翌日 4 月 19 日から 29 日迄の 11 泊 12 日（前泊含み）の日程で、乗り合いタクシーを使った四国八十八ヶ寺お遍路に出ました。三日目の 4 月 21 日午前のことです。23 番札所薬王寺から 24 番札所最御崎寺迄の約 90 km（歩くと二泊三日の行程）の途中で、冒頭の「歩き遍路」に出会ったのです。

この時から 2 年の準備期間を経て「四国八十八ヶ寺歩きお遍路」通し打ちに挑戦です。2023

(令和5)年3月12日、四国八十八ヶ寺歩きお遍路巡礼に向けて家を出ます。1番札所霊山寺から88番札所迄を50日かけて巡拝し、その後は、折角なので88番札所大窪寺から1番札所霊山寺までの45kmを二日掛けて戻り、四国八十八ヶ寺を一つの輪につなぎ、結願のお礼参り。また、これは定番のようなのですが、高野山「奥の院」を参拝し、無事に四国八十八ヶ寺をお参りできたことの報告とお礼のお参りをします。その際、高野山の麓にある九度山駅から高野山奥の院までは、紀伊山地の霊場と参詣道「高野山町石道」という約23.5kmの古道があるので、そこも歩いて奥の院を参拝します。

お坊さんになる為に得度する(出家)。そんなたいそうなことではありませんが、四国観光でもありません。1,200年の悠久の歴史の中の一人となって、じっくり自分と向き合いながら、約2ヶ月を過ごします。お遍路の目的は大きく二つです。これまで70有余年、多くの方々にお世話になって今があり、私そして家族の安寧があります。なので、これまで関わって頂いた全ての人々に感謝し、皆様にご加護のあらんことをお祈りすることです。もう一つは、各お寺のご本尊そして弘法大師に「70余年にしてこの地に立てることへの感謝」を伝えることです。

感謝という言葉は、2020(令和2)年10月に菩提寺「壽徳寺」で、ご住職の新たなお役目(位が上がる)のお披露目及び就任式である晋山式がありました。その中で「晋山開堂」と呼ばれる、住職が須弥壇に登り問答を行う儀式があります。その中で、若き僧侶の問い「永平寺での修行を終えた今、これからどのような生き方をすべきか」に対して、住職は「これまで関わった全ての人々に感謝して更なる修行に努めよ」と応えたのです。私は、その場において「感謝」という言葉やその現し方に深く感銘を受け、この時以来、「感謝」という言葉を意識して使うようにしていたのです。

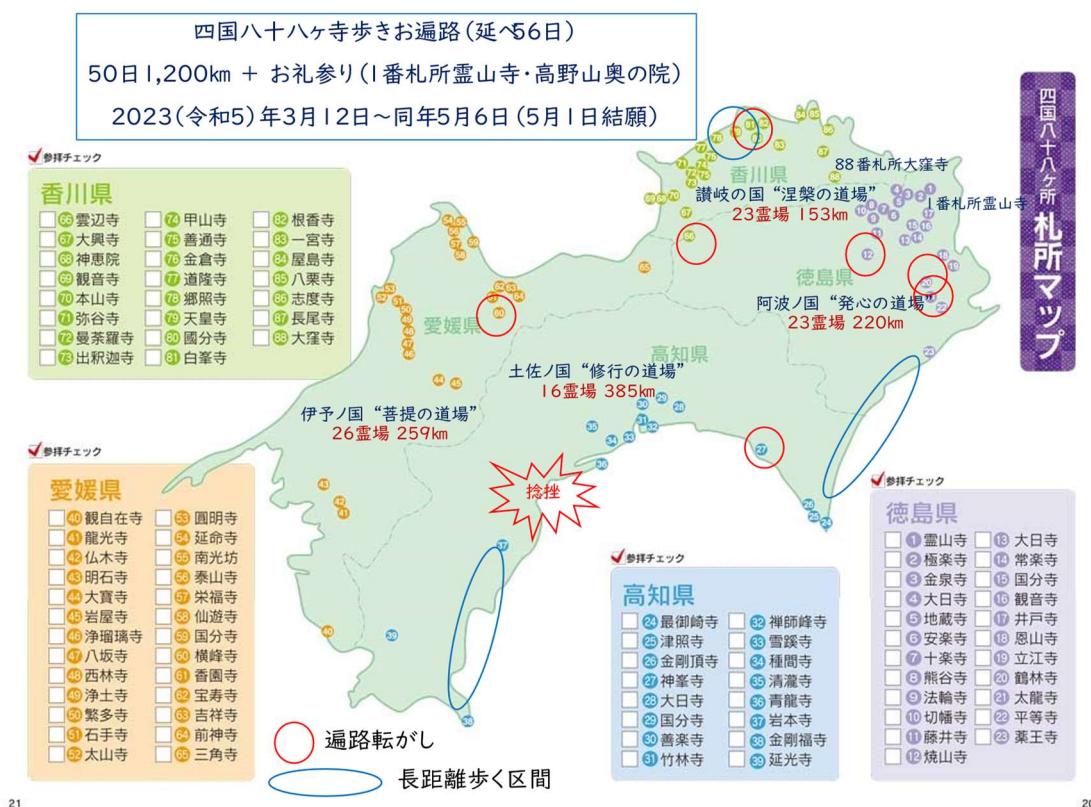
四国八十八ヶ寺お遍路は、全行程が四つに別けられています。徳島県にある1番札所「霊山寺」から始まり、23番札所「薬王寺」迄は、「**発心**」修行への志をかためる区間(271.1km)です。24番札所「最御崎寺」から高知県に入り、ここから39番札所「延光寺」迄は、「**修行**」自らと向き合って苦闘する区間(268.0km)です。40番札所「観自在寺」から愛媛県に入ります。ここから65番札所「三角寺」迄は、「**菩提**」迷いから解かれる区間(390.3km)です。そして、66番札所「雲辺寺」から香川県に入ります。ここから88番札所「大窪寺」(結願の寺)迄は、「**涅槃**」悟りに入る区間(117.4km)です。この様にして、八十八ヶ寺を「発心」「修行」「菩提」「涅槃」と約1,200km参拝しながら修行を重ね結願に至る。これが四国八十八ヶ寺お遍路です。

今回の『社会学を携えた 四国八十八ヶ寺歩きお遍路』は、1番札所から88番札所まで全ての札所を順番に歩いて巡拝する「順打ち、通し打ち歩きお遍路」に挑戦した時の様子を、社会学の視点も加えながらお伝えするものです。本文は、歩きお遍路の持つ魅力を主観的体験を通して書きたいので「1人称視点」で綴り、一日の行程を一遍にまとめて書いています。一日の行程の終わりには、その日の歩いた距離数や消費カロリー及び高低差等の数値データをメモの形で残し、歩きお遍路を別の視点でも体験して頂けるようにしています。また、本文の他に、歩きお遍路をする際に参考となる資料的性格の内容を、各テーマ毎に

整理して掲載します。例えば、一番不安の多い足裏の保護や歩きお遍路に必須の装備等々です。1番札所から巡拝を重ねるのと呼応する「楽しい、面白い、充実感、達成感」ではなく「キツイ、苦しい、大変だ〜、もう少し、あと10分だけ、歩けた、嬉しい、有り難い」という日々の機微を振り返って、歩きお遍路の旅を迫体験していただきます。これを読み終えたとき、みなさまの四国八十八ヶ寺歩きお遍路に対するイメージや魅力がこれまで以上にはっきりしてくることを願っています。

それではみなさん、これから1年間に渡る、毎週の月曜日、私と一緒に同行二人（128の母を加えて三人かな）の修行に出立しましょう。

本間照雄（地域福祉研究所）



四国八十八ヶ寺霊場の位置図